# 万葉集

天皇、蒲生野に遊猟するときに、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

（巻一・雑歌）　額田王

皇太子の答ふる御歌

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも

（巻一・雑歌）　大海人皇子

軽皇子、安騎の野に宿らせるときに、柿本朝臣人麻呂が作る歌

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

（巻一・雑歌）　柿本人麻呂

山部宿禰赤人、富士の山を望む歌

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振りさけ見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は

（巻三・雑歌）　山部赤人

反歌

田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける

（巻三・雑歌）

山上憶良臣、宴をまかる歌

憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ

（巻三・雑歌）　山上憶良

東歌

多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のここだかなしき

作者未詳

（巻十四・相聞）

二十五日に作る歌一首

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

大伴家持

（巻十九）

父母が頭かきなで幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

防人歌

（巻二十）